Do ～ Loop　No.5　2013/05/7

ＩＦ関数で成績処理案づくり

私たちは、いちいちの学習活動で、その評価規準に照らして「A･B･C」をつけますが、その基準を数値として設定できれば、成績処理の手間は随分軽減されるはずです。このとき役に立つのが、「ＩＦ関数」です。【ＩＦ文とも呼ばれます】

コンピュータで成績を処理するときには、「感覚」や「思い込み」を排除し、「数値化」（「資料化」）で行います。場合により数値化は難しいこともありますが、通知表に表すという目的は、要するに数値化ですよね。教科や活動により、教師の鋭敏な「センサー」が数値化の拠(よ)り所となることは言うまでもありません。

たとえば、基準の数値として、つぎのようなハードルを設定するとします。

４０点を越えたら「Ｂ」、それ以下は「Ｃ」

これを処理してみましょう。

IF文１つで判断できるのは、１つの条件のみです。

IF関数の構文は、次の通りです。

= if(**判定条件**，**真**【条件が当てはまる場合の処理】，**偽**【当てはまらない場合の処理】)

ですから、先ほどの条件を式に表せば、

判定条件　真　偽

=if(A1>40,"B","C")

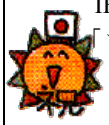
【読み方】

IF 文の開始宣言

「もし、セルＡ１が４０を越えていたら」

「Ｂを表示します」

「でも、そうでなかったら、Ｃを表示する」



「B」ではなく、「"B"」とあるのは、文字列として扱うからです。Excel で関数の結果として文字列を表示させたいときには、このようにダブルクォーテーションでくくります。ダブルクォーテーションは、「Shift」を押しながら「２」キーを押すと出てきます。

=if(A1>40,B,C)　この場合は、エラーになります。

=if(A1>40,20,10)　エラーではありません。結果は、「数値」として表示されます。

=if(A1>40,"20","10")　エラーではありませんが、結果は「文字列」として表示されます。

見た目は同じでも、数値かそうでないかは重要です。数値には大きさがあり、比較・演算ができますが、文字列はそういうわけにはいきません。出された結果をもとにさらに演算がしたい場合は、ダブルクォーテーションは外しておきましょう。

ＩＦ文のネスト

=if(A1>40,"B","C")だけでは、実際には使い物になりません。条件は１つではないからです。ＡとＢとＣに分岐させるためには、ＩＦ文を入れ子構造にします。読んでみて下さい。

（例）=if(A1>80,"A",if(A1>40,"B","C"))　←　線部が「偽」の処理ですね